

私ができることを

西部中・2

多羅尾 里奈

パパ、手術で入院することになった。」

母からこの話を聞いたとき、「瞬時が止まったように感じました。父が家にいないということに我が家は大きな不安に襲われました。父の入院が決まったのは六月下旬。父は昔から、

腰が痛い。」

と言っており、長距離の移動がとても辛そうでした。腰の痛みを治すため病院に通い、多くの治療も行い、薬も飲みましたが、腰の痛みは全くよくなりませんでした。次第に腰の痛みは悪化していき、仕事をするのも難しくなっていました。腰の痛みに加え、足の痺れもでてきました。痺れのせいで眠れない日々が続いたそうです。段々歩くことも難しくなり、日常生活にも支障をきたすようになりました。父は仕事のことと考え、腰の手術をすることに決めました。しかし、手術は思っていたより大きな手術で長期間の入院が必要と言われました。そこで、父の入院が決まりました。

入院が決まってからは、父に負担をかけないよう、今まで父がやってくれていたことを家族全員で積極的に取り組みました。ペットのケージ掃除など、家族が忙しくてできなかったことを父は自分から何も言わずにやってくれていました。その姿を何度も見ていましたが、お礼を言うことはできていませんでした。母は仕事や家事で疲れていて、姉は高校生で夜遅くまで部活があるので帰りが遅いです。私は中学生で母や姉と比べると、部活の終わる時間も早いし時間もあるので、自分から家族のために動かないと思うようになりました。

そして、父の入院当日。私は学校へ行く準備を終え外へ出ようと

したとき、父がリビングから出てきて、

「いつてらっしゃい。」

と笑顔で言ってくれました。父の言葉を聞いたとき、ああ、次にこの声を聞けるのはいつなのかと寂しくなりました。

ここから父が家に居ない生活が始まりました。学校で授業を受けていても父が今どんな様子なのかと不安になってきてなかなか授業に集中できませんでした。家に帰っても父はおらず、いつも騒がしいリビングは、しんとしていました。晩御飯の時、家族で囲んでいた食卓は父がいなくて一つの穴があいた感じがしました。中学生である自分のこと、父のことだけでなくさんの不安がある中、私の中でもう一つ大きな不安と心配がありました。

それは母のことです。母はいつでも家族のことを優先してくれま

す。父が、

腰が痛い。」

と言うと、母がいちばん最初に動いて父のことを支えています。その姿を見ていると本当に母は素敵だなと思います。夜、母に何気なく、

パパの入院についてどう思う。

と聞きました。母はしばらくしてから、

「ゴキブリ出たらどうしようって思ったよ。」

と笑っていました。しかし、私から見ていると、冗談で言っているけど本当は家のことですごく不安なんだろうなと感じました。食器洗いや洗濯をしているところを見るとすごく疲れているのかなという姿をよく見ます。その姿の母を見たら、母は私のことをずっと近くで支えてくれたので次は私が母を支えていきたいと思いました。

その日からは自分から積極的に手伝いをするようになりました。自分が疲れていても頑張らないと自分に言い聞かせて毎日過ごしていました。七月上旬。母と父が入院している病院へお見舞いに行くことになりました。久しぶりに父に会うということに少し気まずさ

がありました。父の入院前、父に冷たく接してしまっていたことを思い出してしまって、最初は久しぶりに会えるとわくわくしていたけど、今までのことを思い出して申し訳ないことをしたという気持ちが大きくなりました。いざ父に会いに行くために談話室へ行くと、歩行器をもった父の姿がありました。手術は数時間にわたり行われ無事成功しました。手術後の父は、まだ腰が痛そうで歩きにくそうでした。そんな状態でも父は、

よっ。」

と笑顔で声をかけてくれました。その笑顔を見た瞬間今までの寂しかった思いや後悔が込み上げてきました。それでも笑顔の父が見られて嬉しかったです。談話室では久しぶりに父と会話をしました。何を話そうか迷っていた私に、

部活はどう。勉強はどんな感じ。」

と父から話しかけてくれました。そのおかげで緊張と気まずさが一気になくなりました。そのまま温かい雰囲気が続き、制限時間の十五分はあっという間に過ぎていました。帰りのエレベーターの場所まで父は一緒に来てくれました。エレベーターに乗り込むとき父が、

じゃあ、またね。」

と笑顔で手を振ってくれました。私もつられて笑顔で手を振り返しました。

それから父の入院は続きました。母はほぼ毎日父のお見舞いに行っていて、私も行けるときは母と一緒にお見舞いに行きました。最初にお見舞いに行ってから、父に何かしてあげたいなと思っていました。母に父の好きなものは何かなどいろいろ聞いて、父の好きな動物であるハシビロコウを毛糸で作ってプレゼントしようと思いました。私は裁縫などの細かい作業が得意なので、自分の得意なことで父をもっと元気にしてあげたいと思いました。しかし、私が今まで作ってきたのはフェルトやミシンなど学校の授業で習ったことや、独学でやってきたことばかりだったので毛糸で作るということ

は初めての挑戦でした。それでも何度も練習し、何度も失敗したけど諦めずに練習した結果、毛糸でハシビロコウを作ることができました。父に作ったハシビロコウをプレゼントすると父は、

すごいじゃん。ありがとう。」

とすごく喜んでくれました。その言葉を聞いて私は、嬉しかったのと少し恥ずかしいなという二つの気持ちが混ざっていました。

今回初めて父がいけないということを経験して最初は多くの不安が襲ってくる日が続きましたが、自分が家族にしてあげられることは何かを自分で考えて行動するということを身につけられた期間でもありました。ここで終わりではなく、いちばん近くで私のことを支えてくれた家族のことを次は私が支えていくということを帰ってきた父やいつも家族のことを優先してくれる母、いつも隣にいてくれる姉の笑顔に約束しました。